五高新聞

１　９　３　号

12月23日（水曜日）

発行所　五島高校
発行責任　五島高校新聞部
編集　森憩

相手を思いやる心

芸術鑑賞会

二〇二〇年十一月十日、福江文化会館にて、芸術鑑賞会が行われた。東京芸術座による、「未来」という題名のいじめに関する劇を鑑賞した。

明るい曲から、少しずつ暗くなる会場、時計の音だけが響き、会場に緊張感が漂う。「ただいま～。」から始まる姉弟の会話。何気ない会話の中にも張りのある声、感情のこもった一つ一つの言葉で私たちは劇の中へと引きこまれた。

劇中の様々なセリフ。その中で最も記憶に残っているセリフは、「明日のことが嫌だから死ぬのか、今日生きるのが嫌だから死ぬのか。」というセリフである。私はテレビで誰かが自殺したニュースを見て、いじめられて嫌ならばどこか遠い地で生きればいいのにと思ったことがある。しかし芸術鑑賞会でこのセリフを聞き、考えさせられた。いじめられた側は、被害者である。自殺を決意するということは、身近な人間で助けてくれる人が一人もいなかったのかもしれない。そういう状況に置かれた人は、遠い地に行ったとしても、「果たして自分を助けてくれる人はいるのだろうか。」「またいじめられるのではないか。」と考えてしまっても仕方ない。そんなことになるくらいなら死んだほうがましだ、と考える人もいるのかもしれないと思った。

「人に心を踏みにじられてでも、相手を思いやる心を持っていたい」これは当事者にとってみれば、難しいことかもしれない。しかし確かに、傷つけられた仕返しに他の誰かを傷つけるよりも、その人のことを思う思いやりを持てたらいいなと思う。そして苦しんでいる人に気づき、寄り添える心を持てたらいいなと思う。

東京芸術座の大橋さん（左）と前田さん（右）

開演を待つ生徒たち

観客へ向けてお辞儀をする二人

避けて通ることはできないもの

上演が終了し、生徒たちが学校へと足を向ける中、舞台裏では忙しそうに片づけをする東京芸術座の方々の姿があった。そんな中、劇の中で「慟哭の会」の手塚新造さん役を演じられた笹岡洋介さんがインタビューに答えてくれた。

Q なぜいじめをテーマとした舞台を上映されたのでしょうか？

「青少年の未来＝国民の未来じゃないですか。それこそ世の中っていろんなことがあり、丸ごと身に受け、そんな中で乗り越えていく力を身につけたりしていく。その乗り越えていく力を今の青少年の方達に教えていくために、私たちはこの劇をやると決めているんです。

いじめというものは、避けて通ることはできません。そしていろんな形がある、というのがいじめです。しかし大抵の場合、いじめというものに蓋をしてしまい、現実を見ようとはしない。私たちは蓋を外して現実を見て、その後の責任について考えなければならないんです。」

Q 今回上映された「未来」の見所は？

「見た人が感じることや感動する場面はそれぞれ違います。一つでも共感を呼ぶような劇にするために、意外性や「信じられない！」というドッキリの連続を様々な場面にちりばめているのです。ただ、舞台は役者だけで成り立っているわけではありません。照明や音響などの裏方の人たちも合わさり、観客との関係を吟味しながら舞台を作っているので、そういうところにも目を向けてほしいと思います。」

Q 五島高校の生徒へ

「自分の中の人生の勉強を見つけて、大人になっても勉強してほしいです。」

笹岡洋介（ささおかようすけ）さん（73歳）

東京芸術座所属。
中学校2年生まではバイオリンを演奏していたが、音楽の才能が無いと思い楽器を手放した。しかし音楽への情熱は冷めず、70歳になってアコーディオンを始めたそう。

真剣な表情で語る笹岡さん。劇中でみゆきさんが「あなたの人生を私はともに生きていく。」と語る場面では、自分のしたことに責任を負うことの重みを感じられた。インタビューの中で笹岡さんは「”死ぬ”や”殺す”という言葉を簡単に考えないで。」と話されていた。

現在インターネットというメディアが浸透し、自分の意見を様々な場所へ発信できる世の中になった。自分の意見を発信するとき、全員が自分の言葉に責任を持っているかと訊ねられた時、自信を持って「はい」と答えられる人は少ないだろう。笹岡さんの言葉から、一人一人の責任感、そして相手を思いやることの大切さを改めて考えさせられた。

五高新聞からのお知らせ

五島高校新聞部は現在二年生一名で活動しています。国語が苦手でも大丈夫です。是非、一緒に新聞を作りませんか？水曜日と木曜日に活動しています。興味のある人は二年生の新聞部まで！